

福島県現代俳句協会会報

第10号 2022年・春

編集 福島県現代俳句協会会報編集部 春日 石疼

令和四年度県現俳総会

書面による決議で

オミクロン株拡大のため

2年前から新型コロナウイルスの感染拡大が続き、4月に予定をしていた総会も、開催が不透明な状況です。3年度はリアル開催が出来ましたが、準備等の関係もあり、4年度は書面による決議をいただく運びといたしました。議案については追ってご送付いたします。

新刊案内

『鳥雲に』 池田 義弘

「鳥雲に」は池田氏の第三句集で、昭和61年の「氷る機関車」、平成18年の「白鳥」に次ぐ刊行である。加藤楸邨を師に、「真実感合」「生命句」に徹し、どの作品も感銘を受け、特に白鳥を詠む作品は深みがあり、他に類を見ない。

本句集にも30余句あり、池田氏の特性と言えよう。白鳥、生命句を上げると、

大地震白鳥棹に鳴き帰る 義弘

3・11東日本大震災時の作。原発事故発生を思うと白鳥の生命をわが事のように安堵し、見送る作者の優しい心情を伺うことができる。

捨てるために搾る牛乳花柘榴 義弘

「真実感合」の句。搾乳をせねば、乳牛自体弱ってしまう。被曝された牧草を食む牛の乳は基準値越えの放射線量のため捨てざるを得ない。畜産農家のやるせない悲しみと牛を労わる心情を詠んでいよう。

フクシマは人体実験羽抜鶏 義弘

羽抜鶏の姿を見、放射線下のフクシマの人々は、生きながらの人体実験に遭遇しているのではと思う。事故発生の原発地点から20km圏内の人々は全員他地区、他県への避難を余儀なくされ、身体線量が

新入会員紹介

宗像 眞知子（三春・小熊座、藍生）

初霜の朝日地霊を目覚めさす

秋霖や瓦礫の中に三輪車

近隣のみな桜守滝櫻

樹齡千年といわれる滝櫻のある三春町に住んでいます。滝櫻には四季折々の感動を・・・又、福島県民であるがゆえの句を詠んでいきたいと思っています。

藤巻 淳（福島・小熊座）

みちのくの生けるもの皆冬の海

牡蠣剥きの牡蠣の心臓あたりかな

針の穴かざせば見えし冬の虹

激動の現代を四季を感じ取りながら、自分なりの表現で形に残したいと思ひ俳句を始めました。どうぞ宜しくお願い致します。

紙上通信句会のお知らせ

同封のおはがきで「未発表句」

1句をご応募下さい。

締め切りは3月15日。

応募された方には、後日投句一覧表と選句用紙を送ります。互選となります。結果発表は会報11号で。



会員作品7句

雪がまた

大河原 真青 (郡山・小熊座、桔槔)

腐木踏み明日へ分け入る冬の鹿
月球に未踏山脈大根干す
東北は鬼門と呼ばれ海鼠噛む
冬苺まつろはぬ民鬼と化す
朽野ねむらせイマジンを口遊む
ダイヤモンドダスト聖母に翼あり
産土の穢土隠さんと雪がまた

心の芯

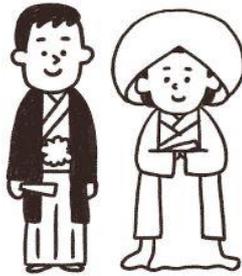
渡部 健 (千葉県・暖響、藍生)

愁思とてフクシマは吾が心の芯
サクランボの中にフクシマの友便り
フクシマへ切なく鳴けり蝉時雨
緑陰に母乳あかごのふくよかさ
日焼けせる腕こくこくと血圧計
白髪となりし弟梨を剥く
葺切の明日は明日はと今日を鳴く

むさかりの絵馬

鈴木 正治 (福島・暖響、鈴の会)

むさかりの絵馬の剥落鳥雲に
雲食べて亀は思考の咽伸べ
津波の碑沖夕焼けは泣けとごと
滝壺に溺れし蝶と十年過ぐ
生や死や音楽バスが花野行く
すさまじや死者に抜身の鉦を置く
冬オリオン歩数占いポストまで



秋一列らんぱん

平子 玲子
(いわき・ロマネコンティ俳句ソシエテ)

線量を測りて捨てる稲を刈り
支持政党なしに印せる秋灯下
花八ツ手一列らんぱん破裂して
秋雷の美しすぎる自爆かな
晴れ渡る白鳥の空大ビュッフェ
ジャックアンドベティと声に開戦日
玉手箱開けるのに佳き冬日和

種火

服部 きみ子 (福島)

散りて後骨片となるチューリップ
直向きに生きた昭和や冷奴
象の目のやさしさに在る敗戦忌
特老の待機百人鰯雲
ピノキオの鼻のふくらむ日向ぼこ
狐火に種火を貰ふひとり住み
生命線延ぶる二人の根深汁



臃

八島 ジュン (福島・小熊座)

九階へボタン桜の枝で押す
どこまでが此岸であるか夕桜
クローバー少女の日々がうづくまる
スカートに似合わぬ姉や柿の花
腑の奥までも春大あくび
おぼろ夜の象の軽さを量りけり
春の暮昭和映画の未来都市

私を変えた一句

雨垂れの音も年とつた

種田山頭火

気まぐれな一言で、俳句を始めるようになりまし
た。本も読まず、国語も得意なわけじゃなく、ただ
興味だけ。句会に参加して知識の無さを痛感しまし
た。そんな私が、次の句と出会いました。難しい語
彙を使わなくとも、普段使いの言葉で作句が出来る
と思うようになりました。

雨垂れの音も年とつた

種田山頭火

雪の朝二の字二の字の下駄の跡

田捨女

赤とんぼじつとしたまま明日どうする

風天

こんな普段使いの言葉がつながって、言葉が躍る感
じがします。自分が、その場に居るようで、自分の
身の上と重ねることもあります。

その後作句した中で何となく気に入った句です。

えんぴつの角が気になるクリスマス

虫時雨封筒小さく収まらぬ

草刈りの後に一輪背伸びして

自分では情景や心象が第三者に伝わるだろうと思
いましたが伝わりません。もっとシンプルに、言葉が
生きいき躍る句が作れるようにしたい。先ずは、生
きることを大切にし、言葉で表現できるよう作
句を続けます。

カズオ(福島)

怒らぬから青野でしめる友の首

島津 亮

意外に思われるかもしれませんが、僕の俳句の出
自は「文人俳句」です。元々連句で遊んでいたのが
きっかけで、それは石川淳や丸谷才一などの文人へ
の憧れから。若い僕は音楽も文学も美術も、政治も
科学も哲学も、すべてを統合した総合芸術を理解す
る者でありたいと欲張っていました。連句はいろい
ろな要素が集積された総合芸術であり、それをより
高いところで達成できるのは、いわゆる文人である
と考えていました。だから俳句も、龍之介の「風や
目刺に残る海の色」とか、万太郎の「湯豆腐やいの
ちのはてのうすあかり」などにしびれていました。
初学の頃の僕の俳句もそういう傾向の句が多く、ど
こか学術的・情緒的です。それを叩きのめしたのが
この句です。

これは俳句でしょうか。季語はありません。5・7・
5です。しかし何でしょうか？この意味するもの。

どういうきっかけだったかこの句を知って、僕の
「人のまねはしたくない」大阪人気質が頭を擡げま
した。俳句は完全な世界でなくてもよい。すべての
人に納得されるものでなくてもよい。詠んで悪いも
のはいっつもない。

おそらくそれから僕の俳句は変わったと思います。
まだ文人俳句の尻尾をどこかにつけている自分を感
じる時がありますが、それもこれも私の俳句の要素
だとは思っています。

春日 石疼(福島)

県会員作品一句鑑賞

梅ボツボツこのたそがれが重すぎる

山本 朗史

梅の花が「ボツボツ」咲き始める早春の景であらう
が、春の兆しを寿ぐ気配はない。ボツボツは副詞で
あると同時に「鬱勃」に通うボツで、何か気鬱な思
いが我をとらえて離さない。それを説明ではなく、
早春の「たそがれ」に託し、それも「重すぎる」と
いう、情景に心情を融け込ませて表現する。「春愁」
とも違う、冬から春への季別れと重ねての独自の心
情を詠っていて、魅かれる。(句集『青栗』(昭和
47年刊、鮫川村)所収の作品より)

(五十嵐進・喜多方)

地方紙にくるみ筒送り出す

石澤 遥

節になると、採り立てを親しい人に分けて喜ばれる
のが嬉しい。作者もそんな気心からだろう。読み終
えた新聞を使用するのは日常だった。その地方紙に、
瑞々しい筒をくるんで今年も送り出す様子が浮かぶ。
(県会報第9号「会員作品7句」より)

(鵜川 伸二・郡山)

私の好きな季語

「花杏」

永瀬 十悟

家に樹齢百年の杏の木がある。三月の末に、梅よりやや大きな淡紅色の花が咲く。毎年桜に先駆けて咲くので、少し得した気分になる。その後六月に実を付けるのだが、東日本大震災の地震で幹が途中から折れてしまつてからは、あまり生らなくなつた。今は長く花が咲き続けられることを願つている。

花杏受胎告知の翅音びび

川端茅舎

杏の花の俳句と言へばこの句、「受胎告知」は処女マリアの前に天使が現れ、聖霊による懐妊を告げる場面で、宗教画に多く描かれている。マドリードのブラド美術館で二つの「受胎告知」を見たことがあつた。フラ・アンジェリコの石柱の立ち並んだ石の廊下の古典主義の端正な絵に比べて、エル・グレコの動的で調和の破られた世界は迫力があり、特にマリアの戸惑いと畏れの表情には魅せられた。（倉敷の大原美術館にグレコの別の絵がある）。

この句、受胎告知する天使の羽の音と思ひ込んでいたが、あるとき「翅」の字から杏の花に受粉（受胎告知）をする虫ではないかと思つた。家の杏には鳥がよく来るが（ヒヨドリは花を食べてしまう）、蝶や蜂も来る。わけても「びび」は蜂の印象だ。いずれにしても、春の真昼の受粉という命の営みを明るく描いた茅舎の句、「びび」の響きが美しい。

前号会報より

この句がよかつた

櫻井潤一

巻末に出典ひらく返り花

佐川 盟子

読みすすめる内にどうもひつかかるところがある。

出典を知りたくなるまで心が温まつてくる。

折でもないのに庭に花が咲いている。

啐啄の機というものか。

秋風や誰にも会えぬ糸切り歯 草野 志津久

針仕事をする女性も少なくなつた。

針仕事してもスマートにはさみを使うだろう。糸切り歯はもう死語である。

艶・粘りこれぞ新米香る朝

石澤 遥

朝起きてご飯の炊ける匂いが家中にただよふ。特に新米の節は水加減、研ぎ方などにも気を使う。多くの手間をかけた、米を大切にする、日本の食卓だ。

錦秋やわが巡礼は途上なり

国分 衣麻

一歩一歩祈りの旅のような人生。日々を大切に作る作者の生き方が窺える。場を浄めてゆくような作者の一歩は聖地となつてゆくような気がする。人生は巡礼だ。

大根炊く正しき人であるやうに

佐藤 保子

生き方には正邪善悪の別があるう。だが大抵の人間は正とも邪とも善とも悪とも判断のつかぬところをうろついているだけだろう。しかし大根を炊くことで自分を正へと向かわせる作者の意気が窺える。

鰯雲胸の奥処の襞と視る

久保 羯鼓

空を見上げ自分のはらわたを探る。襞深き鰯雲に自分の内面が映る。人生の辛酸を知ることにより襞深き人となる。襞の深さがその人柄となつてゆくのであろう。

【編集後記】

県会報が、めでたく2桁の第十号となりました。今年も、年4回会報を発行できたらと思つています。会員の皆様には、年に1、2回ほど原稿をお願いします。今年も、ご協力いただき、心より感謝申し上げます。今年も、どうぞよろしくお願い致します。（E）